

特別編

花 火

はな

福岡

九州の逸品

KYUSYU NO IPPIN

FILE No.62

九州の「地域ブランド」を
ご紹介致します。

Photo by T.Watanabe
今年10月31日に開催された三陸花火大会での花火

花火に込められた

本来の意味

江戸時代、享保17年（1732年）の大飢饉で多くの餓死者が出て、そこへ追い打ちをかけるように疫病が流行した折、八代將軍の徳川吉宗を戴く幕府は翌年、犠牲となった人々の慰霊と悪疫退散を祈って、隅田川で水神祭を行いました。そして、この時に打ち上げられた花火が、わが国の花火の起源とされています。今や、花火は夏の風物詩として、祭りやイベント会場などにおける余興の一つとなっていますが、本来は、そういった意味が込められたものでした。

今年4月、北九州市内の夜空に祈りの花火を打ち上げて話題となった、花火製造会社の株式会社ワキノアートファクトリーの

代表・脇野正裕さんに話を伺いました。

社員の発案による活動が

「絆」を生むきっかけに

今年は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のために各地で花火大会の中止発表が相次ぎました。そのような年にあつて当社では、4月7日に緊急事態宣言が発令された3日後と、さらにはその一週間後に、見物客が集まらないよう、場所を知らせず、日時のみを告知して、それぞれ約30発の花火を打ち上げました。発案したのは当社の社員で、どこからお金をいただくか、一日常を取り戻せずに下を向いてしまいがちな人々が、花火を見るために上を向く一瞬だけでも、幸せな気持ちになつてほしい」

という気持ちから実施に踏み切りました。

その後、当社の取り組みを見て同じような思いを抱いていた全国の花火業者が当社を含めて連携する形となり、場所と時間を非公開とし、全国7か所で7月下旬

から8月初旬にかけて「キズナハナビ」と銘打った花火の打ち上げを実施。資金の一部はクラウドファンディングで募り、打ち上げの様子を撮影し編集した動画を返礼品としました。



株式会社ワキノアートファクトリー 脇野正裕社長



1.2.玉込めの様子／3.4.打上げ筒に花火玉を入れる／5.花火玉に貼るクラフト紙を均一にカット／6.玉貼り作業。花火玉にクラフト紙を貼り重ねていく

コンピュータ制御の 花火イベントに挑む

このような試みは、当然ですが、当社の65年に及ぶ歴史のなかでも初めてのことです。そもそも当社の事業は、祖父が小倉の巨過市場で始めた玩具店で売った花火を発端としており、二代目の父を経て、私が経営を引き継いで現在に到るまでには、さまざまな転機、紆余曲折がありました。

社会人となって東京のイベント制作会社などで働いていた私が帰郷して当社に入った際、花火事業に関する知識はほぼゼロからのスタートでした。花火の打ち上げを行う際には行政機関への許可申請が必要不可欠なのですが、当時の私はそんなことさえ知らず、お客様から「許可の申請は済んだ？」

と聞かれて、初めて理解する始末でした。

しかも、当時の社内事情から、まもなく専務を任され、経理業務も人事管理も手探りの毎日。20年以上前でしたから、数字一つでも人力でいちいち計算するような状態でしたが、今にして思えば、その経験が今の自分の土台を造ってくれたともいえます。

私が入社した頃には、すでにハウステンボスの花火イベントを請け負っていて、ここでようやく、それまでに身に付けていた知識を活かすことができました。現在は、花火の打ち上げは、ある程度コンピュータ制御で行うのが当たり前になっていますが、その当時は職人の手作業に負う部分がほとんどです。しかし、ハウステンボスの花火イベントでは、早くからコンピュー

タプログラムの要素を取り入れており、学生時代から趣味で音楽ソフトなどを扱っていた私は、音響面を担当している会社と協力して独自のシステムを組み上げ、音楽を演出に取り入れた花火ショーを実現しました。これは当社の花火演出スタイルの原型で、業界での先駆けとなりました。

真似ると越えられない、だから教わらない

花火の打ち上げをコンピュータ制御化していく方向性を私が推し進めたのには、もう一つの理由があります。それは、事故のリスクを低減させるため。打ち上げ時に職人が安全な距離をとった場所にいるには、点火を遠隔コントロールする必要があります。

しかしながら、その取り組みは図らずも、従来のやり方にこだわる職人が次々と会社を離れる結果を招きました。熟練の職人がいなくなれば、その分、職場からは伝統的技術のノウハウが消えてしまう。そうなると、競技会で上位の賞は狙えません。そのために、ベテランばかりか若手まで去っていった時期もありました。

熟練の職人がなくなった分の穴埋めをどうするか。考え抜いた末に私が出した結論は、自分自身が熟練の技術を身に付けること。しかも、入口の部分では人に教わるところはありませんが、ほとんどは自らが試行錯誤して得たものの、いわば自力で編み出したものです。社員のなかには「生みの苦しみを味わうより、真似したほうが早い」と言う者もいました。真似

をするのは近道かもしれませんが、それでは真に自分のものにはならないし、誰かのコピーであるところから抜け出せず、元を越えられない。

失敗と検

証を重ね、創意工夫を加え続ける覚悟がないと、新たな価値は生み出せない、私は考えます。「生みの苦しみ」ではなく「生みの歓び」を味わうのに貪欲な私自身の性格によるものかもしれない。

変えずに守り続ける伝統と、
変革で生まれる魅力

当社の事業の軸足は、花火そのものの魅力だけでなく、花火体験



Photo by T.Watanabe
今年10月31日に開催された三陸花火大会での花火



花火をプログラミング

に感じる魅力をより豊かなものにしていく活動にあります。先ほど、伝統的な技術の話をしたが、花火の製造において、花火を球体にしたのも、花火の中に花火を仕込む技術を発展させてきたのも、日本独自の伝統技術です。技術者や業界関係者の間では、幾重に花火を仕込むかでお互いの技能を判断する傾向がある一方で、花火大会を見物する一般の人たちが

求める花火の楽しさはすでにそれとは違うところにある、といっても過言ではないでしょう。

花火における伝統技術の継承を否定するつもりはありません。しかし、それと同時に、VR、AR、5Gなどに代表される、終わりのなき技術革新に伴って移り変わるエンターテインメントの最前線に注目しながら果敢に先端技術を取り入れていく姿勢が、この業界には必要です。例えば、ドローン技術がそうでしょう。現段階では、制御技術や法規制などの観点から、まだ黎明期と表現せざるを得ませんが、花火とドローンの有機的融合による魅力的な非日常空間の提供は、それほど遠い将来の話ではないと考えています。

その前に、「コロナ禍における花火イベントがどうあるべきか」を

検討し、実践する。それが当面の私たちの課題であり、試みの第一弾として、12月18日から3日間、福岡県福津市恋の浦で花火イベントを開催します。「最先端観光コンテンツインキュベーター事業」の実績があるFFGビジネスコンサルティングや福岡銀行地域共創部の協力のもと計画しているのは、1日3千人限定、ドライブインシアター形式も取り入れたイベント。本件を通じて新たな花火鑑賞スタイルを創出し、全国の花火事業者の希望の光になればと思っています。

エンニチファンディングでも、特別記念品付きチケット等を販売しております



株式会社 ワキノアートファクトリー

- 代表取締役社長 わきの まさひろ 脇野 正裕
- 住所：北九州市小倉南区大字呼野601-12
- 電話：093-451-2500
- ホームページ：
<http://www.wakino-art-factory.com>
- 取引銀行：福岡銀行 守恒支店



オフィス